

学んで守る、旅で伝える

世界遺産アカデミー

WHA MR

メンバーズレポート

World Heritage
Academy

2013年 夏号
第20号



ドイツの世界文化遺産「ポツダムとベルリンの宮殿と庭園」の、
ツェツィーリエンホーフ宮殿

P2 ~ P5...View Point 20 巻頭インタビュー

明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授 岩下 哲典 氏

世界遺産 『富士山—信仰の対象と芸術の源泉』

江戸時代に流行した民衆信仰「富士講」と、日本人本来の心の領域

P6...Academy News

P7...新・マイスター見聞録... 未来の世界遺産 マイスター・セレクション ...

P8...WHA member Report

P9...WHA member File

P10...世界遺産旅行記

世界遺産『富士山—信仰の対象と芸術の源泉』 江戸時代に流行した民衆信仰「富士講」と、日本人本来の心の領域

第37回世界遺産委員会で世界文化遺産に登録された、『富士山—信仰の対象と芸術の源泉』の根源には、江戸時代に流行した「富士講」があります。今回のViewPoint20は、日本近世・近代史を専門とされている、明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授 岩下 哲典（いわした・てつり）氏に、富士講の歴史を解説いただき、世界遺産となった富士山のこれからの展望について、お話をいただきました。



明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授 岩下 哲典 氏

—“富士山信仰”の 根源にあるもの

260年以上も続いた江戸時代は徳川幕府の強力な政治支配で知られていますが、実際には日本各地に外様や譜代、家門大名が混在し、幕府は難儀な舵取りを強いられていました。さらに、大名や旗本たちの持つ領地の中に、村民や町民たちが生活しているわけですから、中央集権体制の確立は実際には不可能でした。このような状況と幕府の財政的な理由から、幕藩体制では、可能な限り少ない武力による、外様大名を含めた地方コントロールと、一般庶民の統制が必要となりました。江戸時代における“土農工商”制度の実態は、各層ごとにある程度の自治性を認めた上での身分制度でした。武人、侍等の管理者は少なければ少ないほど良く、管理者は各集団の頭（トップ）だけを管理し、頭にその集団を統率させるのです。このような社会統治システム

は、オスマントルコ帝国や、インドの藩王国でも類似のものが認められます。

ところで、現代で認識されている「富士講」は江戸時代に成立した民衆信仰で、それ以前は、“富士山信仰”や、“山岳信仰”、“山岳修験”と称した方が適切でしょう。富士山への信仰を厳しい修行によって実践する人たちが、戦国時代から江戸時代初頭に現れました。その代表的人物が17世紀初頭、戦国期の修験者の長谷川角行（はせがわ・かくぎょう）

です。角行は、富士宮の人穴（ひとあな、『吾妻鏡』にも登場する浅間大菩薩の所在とされる穴）に籠り、四寸五分（約13.5cm）の角材に、千日間、杖一本のみで立ち続けるという荒行を成し遂げたとされています。また、“家康は角行により導かれた”と、「富士講」に纏わる書物の中では記されており、平和な江戸時代の礎を築いたのは角行である、というのが、富士講のひとつの拠り所となっています。

その後、角行の教えは村上光清（むらかみ・こうせい）と、食行身禄（じきぎょう・みろく）を筆頭とする、ふたつの宗派へと分裂しました。村上光清は、山梨県富士吉田市にある北口本宮富士浅間神社（きたぐちほんぐう・ふじ・せんげん・じんじゃ）を整備したことで知られ、大名など上層階級の人たちからの信仰が厚かった人物です。一方、食行身禄は、実践倫理を中心に、「土農工商、その身その身に備わりたる家職を大切に努

めよ」と真面目に家業を営むことを説きます。“家業が発展すれば糧を得られる、糧を得ることで安心して生まれ変わる＝ますます生まれ増す”というのが、身禄の教えです。身禄という名前は弥勒菩薩に由来しています。身禄は、人々に救世観を説き、“みろくの世”を予言した後、世の苦しみを全て背負って入定（にゅうじょう）するのだと、1733年に富士山頂付近で即身仏（そくしんぶつ）、つまり宗教的自殺を遂げました。真面目に

生活していれば自分たちは救われる、という教えは、現世に不満を抱く江戸庶民たちに熱狂的に迎え入れられました。その後、食行身禄の娘、花（はな）が、父の富士講信仰を受け継ぎます。花は女性でしたので、江戸時代には珍しく、富士講は男女平等の思想ももっていました。1757年頃になると、“共に仏道を修める”という意味で、浄土真宗に由来する「同行（どうぎょう）」としてきた富士山信者達が、「富士講」であると認識する

ようになりました。そして、花の教えを継承した伊藤参行の弟子小谷三志（こたに・さんし）は、花の男女平等思想をさらに徹底させていきます。また、富士山水を使った病気直しや、線香占い、護摩焚きや護符に対して、疑問を投げかけました。食行身禄、花、伊藤参行と継承された教えの通り、実践道徳を積み重ねていくことで救済されるのであり、自分たちは「富士講」ではなく、ふたつとない「不二考」を行う「不二道」とあるという教

今、求められる、失われたものへの回帰



2013年世界遺産に登録された『富士山—信仰の対象と芸術の源泉』

いました。つまり、幕府が各宗派をコントロールし、各宗派内にはヒエラルキーが成立している状況です。修験道や儒学、藩校でさえもこの体制下にありました

が、富士講はこうした統制のもとには含まれていませんでした。1847年に、現在の埼玉県大杉村の富士講信者、願人庄七（がんにん・しょうしち）が、大目付（お

えを説くようになりました。

このように「富士講・不二考」が民衆信仰として、江戸庶民を中心に広まっていくのですが、江戸幕府は、先にお話した通り、集団ごとに管理体制を敷いていました。宗教団体も例外ではありません。神道は神道、仏教は仏教で組織化していました。たとえば仏教においては、各宗派の本山を定め、本山を“触頭”とし、寺社奉行からのお達しは、触頭を経由して末寺まで行きわたる体制が構築されて

おめつけの深谷盛房（ふかや・もりふさ）に直訴します。庄七自身は人穴での断食修行に入っていたため、実際には、代理人であった巢鴨町の田十（でんじゅう）が、富士講は幕府体制を補強する良い教えであり、富士講は世に認められるべき信仰であると、訴えたのです。この直訴によって、富士講信者たちは2年間の取り調べを受けます。その結果、1849年、寺社奉行から“富士講禁止”の触書が発令されてしまいました。小谷三志の説い

た“不二考”はいっさい認められず、「内々心心の者も其の筋へ訴え出よ」とまで、厳しい通達がなされたのです。

禁止令発令の背景には、“江戸八百八講・講中八万人”とまで称された富士講の流行もあり、幕府にとって、庶民が「徒党」を組むことへの大きな懸念がありました。当然、幕府の管理下に入っている各宗教からの突き上げもあったことでしょう。しかしながら、管理され統制されていた宗教は、既に形骸化されていま

した。カタチばかりで江戸庶民の想いを汲み取れなくなってきた宗教に代わり、民衆から支持された信仰形態が富士講であり、その強い求心力ゆえに、幕府からは忌避されてしまったのです。

富士講信者にとっては、富士山は、たとえ遠方で見えなくとも構わないものでした。私の故郷、長野県塩尻市からは富士山は視えず、蓼科山（たてしなやま）がせいぜいです。しかし、富士山に対峙し、富士山を臨む蓼科山を通して、富士

山を想い、富士塚を造るわけです。関東にある富士塚は、実際に富士山を眺められる場所に造られていますが、富士山が視えない場所でも、鏡のように何かを通してでも、“富士山を観る”ことができれば、富士塚がそこにあります。そこには、高い山に対する畏敬の念が存在します。富士講では、富士山の独立した高い峰が、神様の国、高天原（たかまがはら）に繋がっている道であるとされていました。一方で、富士講は、既存宗教にある

ような専任の聖職者が存在せず、現在の家職を重要視するため、代が変わるにつれて、信仰の継続が難しくなっていました。そうして、時代は、武家社会の終焉を迎えます。明治時代になると、政府は、脱亜入欧を目標に、これまでの価値観を否定していきます。西洋思想が受け入れられ、民衆も昔ながらの身分や、家職に頼らなくても生活できるようになり、結果として、古いものは廃れていきました。明治初期にはまだ信仰登山が多く、1874年（明治7年）の7月から9月にかけて、富士講信者による富士山登

山について記載しているオランダ人技師、イザーク・アンネ・リンドの記録も残っていますが、やがて信仰登山は旧いものとみなされ、富士山への登山目的は観光目的へと変化していきました。

——世界遺産が何かという 問いかけがないまま、 登録されてしまった富士山

今年、『富士山—信仰の対象と芸術の源泉』が世界遺産登録されたことは、明治維新以前に存在した日本独自の価値観

が、ふたたび問い直されているのではないかと思います。ICOMOSによって指摘された、景観問題や構成資産の有機的関連性についても、まだまだ課題は山積みです。長谷川角行は、富士山周辺の内八海（うちはっかい）の他、栃木県の中禅寺湖や箱根の芦ノ湖を含む外八海（そとはっかい）で修行し、富士山の周囲を遠くから廻り、身体を清めながら、長い時間をかけて、富士山の中心を目指していきました。近代化によって100年間以上、忘れ去られていた富士山への畏敬の念と日本古来の信仰心を、世界遺産の



富士山への想いを語られる、岩下先生

登録名に記すことに、私自身は戸惑いを覚えます。認められた中心的価値は、信仰と芸術に関連する「文化的景観」です。

てはならないでしょう。今すぐ実施できる対応策としては、山小屋の収容人数を基準にした登山者数の制限が考えられます。環境整備や入山制限を視野に入れた入山料も必要だと思いますし、弾丸登山などは、健康上の理由からも、全面的に禁止すべきです。適正な登山者数が維持されていれば、山道も崩れることはありませんし、自然環境保護にも繋がります。また、管理責任の所在を明確にする必要があります。通常、世界遺産の登録物件

人気質は、明治時代以降に政府によって強化されたものです。明治政府は、新しい国民国家の形成を目指し、西欧の先進国の仲間入りを目指しました。その為には、国民の一致団結を不可欠として、“上の命令に従う従順性”を個々人に求めました。そうした一方で、目先の利益ばかりを追い求めてきた代償として、私たちは、日本古来の価値観や文化、信仰心など、色々なものを捨て去ってしまったのかもしれない。今回の富士山の世界文

えています。一般的な学校教育での歴史と地理は、別のものとして取り扱われています。ところが、世界遺産を知ること、時間軸として捉える歴史と、空間軸である地理を同時に理解することができます。また、世界遺産は、自然遺産であれば、地学や生物学といった理系分野、危機遺産や負の遺産であれば、政治学や文学も含まれますから、まさに、教養の涵養（かんよう）をすることのできる総合的学問です。私が非常勤講師を務めている都留文科大学では、富士山にもっとも近い場所に所在する公立大学ということ

2016年に予定されているICOMOSの再調査までに、私たちに何ができるのでしょうか。ゴミと人だらけの「信仰の山＝富士山」が、どのように感じられるのでしょうか。そもそも世界遺産が何かという問いかけがないまま、世界遺産に登録されてしまったような気がするのです。

富士山の8合目以降は、あの世だとされていて、富士講では、“登拝（とうはい）”、“御山参拝”による魂の蘇りを、

は国が管理責任者となりますが、私個人の考えとしては、富士山への信仰が世界遺産として認められたわけですから、富士山を御神体として保護する、“富士山御神体保護委員会”を設けるべきだと考えています。富士山を信仰している宗教団体や、行政（政教分離問題が懸念されますが）、観光業・産業界、学識経験者、地権者、地域住民すべてを巻き込んだ委員会が管理していく。音頭を取るとすれば、富士浅間神社が妥当なのではないで

化遺産登録が、日本本来の「信仰と芸術」という心の領域が基盤となっていることを、真摯に受け止めるべきだと思います。今は、これらの価値、素晴らしさ、そして日本人のアイデンティティーを、もう一度振り返り、取り戻すことのできる、またとない機会なのではないでしょうか。



美しい富士山の絶景

一生に一度は体験するよう説かれています。“登拝”の代わりに、江戸市中の富士塚では、富士山の山開きと同時に、遠くから富士山を拜む“遙拝（ようはい）”が行われていました。そうした風習は失われ、信仰心なしに気軽に何度も登山が可能となった時代へと変わりました。

2016年の再調査に向けては、入山規制も含めて、観光面におけるマイナスの側面が増えてくるのではないかと思います。登山者や商用施設の制限も考えなく

しょうか。こういった整備ができないのであれば、たとえ富士山が『ドレスデン・エルベ渓谷』の二の舞を踏んでしまったとしても、仕方ありません。御神体としての保護ができないのであれば、登録を取り消されても構わないぐらいの気持ちで取り組んでいくべきだと思います。

江戸時代の人々は、“右へならえ”で一斉に右を向くような志向では、実は、ありませんでした。他人を必要以上に気にし、団体行動を基本とする現代の日本

——世界遺産は ポテンシャルの高い 教育資源です。

大学教育において、学生たちには、世界遺産を通じて、世界平和や多様な文化・自然は言うまでもなく、時間と空間概念を一体的に把握してもらいたいと考



富士山の御来光（WHA 正会員・中田博之さん撮影）

で、今後、富士山と世界遺産を絡めた講義が始まるようです。世界遺産は総合的なものですから、教育現場において、将来性の高い分野だと思えます。

また、私個人が想い入れの強い世界遺産としては、バルト三国それぞれの首都、リトアニア共和国の『ヴィリニウス歴史地区』、ラトビア共和国の『リガ歴史地区』、エストニア共和国の『タリン歴史地区』です。三国それぞれは小さな国だ

けれども、異なる文化やそれぞれのアイデンティティを大切にしています。私たちは、似通ったものを一緒にたにしてしまいましたが、些細であっても、ひとつの個として捉えていく考え方が大事だと思います。また、故郷・長野県の、辰野町と塩尻市にまたがる両小野地区は、清少納言著『枕草子』に書かれた「憑（たのめ）の里」として知られていますが、1591年にひとつの盆地が豊臣秀吉の

裁定割りによって、“村切り”されてしまった場所です。神社ですら分断されてしまったため、神社の所在地も飛び地扱いですし、たとえば南部地域の村民は、神社参拝のために、北部へと越境しなければなりません。神社移設案や他の対応も考えられたかもしれませんが、時代の変化に流されずに、この地域システムがずっと持続しています。私は、これを宗教信仰心としての“聖”と、村民たちの

2つの生活空間としての“俗”の間にある、“ボーダー”だと考えています。ベルリンの高壁は40年で崩壊しましたが、越えられるボーダーを引くことによって、420年以上もの社会システムを平和的に維持しているのです。世界平和のための境界線は低くあるべきだと、いつか世界遺産に登録されることを願っています。

PERSONAL information

明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授
岩下 哲典（いわした・てつなり）氏

1962年長野県塩尻市北小野（「たのめの里」）生まれ。1994年青山学院大学大学院博士後期課程満期退学。青山学院大学博士（歴史学）。徳川黎明会学会芸員、東京都埋蔵文化財センター文献調査員、国立歴史民俗博物館客員助教授などを経て、現在、明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部教授（大学院応用言語学研究科教授兼任）、徳川林政史研究所特任研究員、放送大学・都留文科大学非常勤講師。主な著作は、『高邁なる幕臣 高橋泥舟』、『日本のインテリジェンス』、『江戸將軍が見た地球』、『改訂増補版 幕末日本の情報活動』、『江戸情報論』など。



第37回 世界遺産委員会 情報

WHA主任研究員 目黒 正武

カンボジア・ブノンペンで開催されていた第37回世界遺産委員会は、2013年6月27日(木)に無事閉会いたしました。新規登録物件は、文化遺産14件、自然遺産5件の合計19件で、世界遺産登録数は981件になりました。

今年の世界遺産委員会に関しては、『富士山—信仰の対象と芸術の源泉』登録の話題が多くのメディアで取り上げられ、ニュース映像などでご覧になった方もいらっしゃると思います。富士山の世界遺産登録は、日本にとって、大変嬉しいニュースとして報道されましたが、問題点も残されていると思います。富士山に関しては、明海大学・岩下哲典先生の解説が巻頭インタビューに掲載されていますので、そちらもご一読ください。富士山の話題を離れて、第37回世界遺産委員会の決定内容に注目してみると、現在の国際情勢を含め様々な問題点が浮上して

きます。そんな中、一番のニュースを選ぶとすると、「シリア・アラブ共和国の6物件、すべてが危機遺産リストに登録」というニュースではないでしょうか。シリアの世界遺産は、東地中海地域における異文化交流の歴史を体現した魅力あふれる物件ばかりです。イギリスの歴史家エドワード・ギボンが「オリエン特屈指の女傑」と称賛し、自らを「クレオパトラの後継者」と位置づけた美人女王「ゼノビア」の伝説に彩られた『古代都市パルミラ』、ヨハネ騎士団とイスラムの英雄「サラディン」の対決の舞台となった『クラック・デ・シュヴァリエとカラット・サラーフ・アッディーン』、現存する世界最古のモスク「ウマイヤ・モスク」を擁する『ダマスカスの旧市街』等々、歴史ロマンにあふれる世界遺産物件の宝庫がシリア・アラブ共和国です。1年ほど前から、銃撃戦で傷ついた各世界遺産の映像が報道

されていましたが、今回の危機遺産リスト登録で世界中のメディアから更なる注目が集まる可能性もあります。「武力紛争の際の文化財保護に関する条約(ハーグ条約)」の有効性に疑問を投げかける為にも、シリアの文化財に焦点を絞った取材が活発になることを祈るばかりです。世界遺産条約に罰則規定は存在しません。唯一の罰則、としては「世界遺産登録抹消」があるだけです。つまり、世界遺産条約は紳士協定でもあります。世界遺産保全を前面に押し出した国際平和実現、が理想論として捉えられてしまう背景には「罰則を持たない国際条約」という現実もあるのかもしれませんが、しかし、「人類共通の財産」である世界遺産を全人類で守っていく根拠に罰則が存在することにも違和感が残ります。世界遺産を「平和の砦」として真の国際平和を目指すならば、罰則ではなく、個々の人間の倫理観に訴えるべきで

す。今回の危機遺産リスト登録が、シリアの国民にとって自国の誇るべき歴史に由来する大切な文化財まで傷つけている状況を自覚する契機となれば、世界遺産活動の大きな成果と言えるかもしれません。

さて、新規登録物件に目を移すと、イタリア共和国が2件、中華人民共和国が2件、と相変わらず世界遺産大国である2カ国が登録数を増やしています。スペイン王国には新規登録物件はありませんでした。それぞれの新規物件は、一覧表をご覧くださいと思いますが、これでイタリアの保有物件数は49件、中国は45件(トランスバウンダリー・サイトを含む)となり、中国がスペインを抜き、世界遺産保有数で世界第2位になりました。両国は、暫定リストも数多く登録しているので、これからも登録数を増やしていく可能性はあります。しかし、特定の地域や国の世界遺産ばかりが増えては、世界遺産リストの信憑性が疑問視される可能性

もあります。ユネスコは、このような事態を防ぐために、1994年に「グローバル・ストラテジー」を打ち出しました。世界遺産登録物件に時代的、地域的な偏りをなくすための施策です。グローバル・ストラテジーの観点で、新規登録物件や範囲拡大物件を見ると、カタール国、フィジー共和国が新たな世界遺産保有国になりました。そして、南アフリカ共和国の「ウクハラバ公園(ドラーケンスベルグ公園)」の範囲拡大により、世界遺産登録名が「マロティ・ドラーケンスベルグ公園」に変更され、「レソト王国」も世界遺産保有国になりました。レソト王国は、立憲君主国で、人口約200万人、面積およそ30,000km²の小さな国です。周りを南アフリカ共和国に囲まれた内陸国で非同盟中立を宣言しています。このような国の存在も、世界遺産に注目する中で初めて知ることかもしれません。朝鮮民主主義人民共和国に2件目の世界遺産が誕生したことも

大きなニュースと言えるでしょう。「開城(けしん)歴史遺跡地区」です。918年から1392年まで続いた王国「高麗」の首都で、風水を取り入れた都市です。宮殿や政府機関、王墓等が具体的登録物件ですが、これで、朝鮮半島の歴代の王朝(統一新羅・高麗・李氏朝鮮)すべての首都と陵墓が世界遺産に登録されたこととなります。高麗は、元寇の際、元にせつつかれ、いやいや日本攻撃の先陣を切ったり、高麗の前身、高句麗の古墳壁画が日本の高松塚古墳の壁画に大きな影響を与えていたりしています。世界遺産登録物件から、2カ国間の歴史を見ていくと、歴史認識を共有できる可能性があります。日中、日韓そして北朝鮮、切っても切れない隣国同士が、ぎくしゃくした関係である現在、世界遺産を通して東アジアの歴史と関係をもう一度検証しても良いのではないのでしょうか。

新規登録物件	NO.	物件名	国名	登録基準
文化遺産	1	アル・ズバラフ考古学的地区	カタール国	(iii)、(iv)、(v)
	2	タウリカ半島の古代都市とチョーラ	ウクライナ	(ii)、(v)
	3	ドゥルヘルムスヘーエ公園	ドイツ連邦共和国	(iii)、(iv)
	4	紅河ハニ族棚田群の文化的景観	中華人民共和国	(iii)、(v)
	5	富士山—信仰の対象と芸術の源泉	日本国	(iii)、(vi)
	6	ゴレスタン宮殿	イラン・イスラム共和国	(i)、(ii)、(iii)、(iv)
	7	ラジャスタンの丘陵砦群	インド共和国	(ii)、(iii)
	8	アガデスの歴史地区	ニジェール共和国	(ii)、(iii)
	9	開城歴史遺跡地区	朝鮮民主主義人民共和国	(ii)、(iii)
	10	レバ歴史的港湾都市	フィジー共和国	(ii)、(iv)
	11	トスカーナのメディチ家の別荘と庭園	イタリア共和国	(ii)、(iv)、(vi)
	12	レッドベイのバスク人捕鯨基地	カナダ	(iii)、(iv)
	13	コインブラ大学—アルタとソフィア	ポルトガル共和国	(ii)、(iv)、(vi)
	14	カルバティア地方のポーランドとウクライナ領にある木造聖堂群	ポーランド共和国およびウクライナ	(iii)、(iv)
自然遺産	1	エル・ピナカーテとグラン・デシエルト・デ・アルタル生物圏保護区	メキシコ合衆国	(vii)、(viii)、(x)
	2	エトナ山	イタリア共和国	(vii)
	3	ナミブ砂漠	ナミビア共和国	(vii)、(viii)、(ix)、(x)
	4	タジキスタン国立公園	タジキスタン共和国	(vii)、(viii)
	5	新疆天山	中華人民共和国	(vii)、(ix)
範囲拡大				
文化遺産	1	ヴィエリチカとボフニャの王立岩塩坑(ヴィエリチカ岩塩坑)	ポーランド共和国	(iv)
自然遺産	1	ケニア山国立公園と自然林	ケニア共和国	(vii)、(ix)
複合遺産	1	マロティ・ドラーケンスベルグ公園(旧:ウクハラバ公園、ドラーケンスベルグ公園)	レソト王国および南アフリカ共和国	(i)、(iii)、(vii)、(x)
危機遺産				
危機遺産リストを脱した遺産	1	バムとその文化的景観	イラン・イスラム共和国	(ii)、(iii)、(iv)、(v)
危機遺産リスト入りした遺産	1	アレppoの旧市街	シリア・アラブ共和国	(iii)、(iv)
	2	隊商都市ボスラ		(i)、(iii)、(vi)
	3	ダマスカスの旧市街		(i)、(ii)、(iii)、(iv)、(vi)
	4	シリア北部の古代集落		(iii)、(iv)、(v)
	5	クラック・デ・シュヴァリエとカラット・サラーフ・アッディーン		(ii)、(iv)
	6	古代都市パルミラ		(i)、(ii)、(iv)
	7	東レンネル		ソロモン諸島

※ UNESCO公式HPの情報をもとに執筆・編集しています。
※ 物件名の日本語訳はWHAが独自に付けたものであり、正式名ではありません。また、今後、変更の場合もあります。

新・マイスター 見聞録

未来の世界遺産 マイスター・セレクション

「新・マイスター見聞録」では、将来の世界遺産として次世代に繋いでいくのにふさわしい自然や遺跡、文化を世界遺産検定マイスターの方々にご紹介させていただきます。さすがはマイスター！と感心させられる魅力的な名勝が並びました。すぐにでも訪れたいくなる未来の世界遺産を御覧ください。

●宇宙的空間 ～モニュメント・バレー～

城戸 透雄（神奈川県）世界遺産検定マイスター／Dentist

「仲間の愛の中で育った子は世界に愛をみつけます」と言う、アメリカインディアンの言葉こそ、世界の遺産だと感じる私が居る。

そんなアメリカインディアンのナバホ族の聖地であるモニュメント・バレーは、至上の場所である。“宇宙小僧”と呼ばれるくらい宇宙好きの私の心を、驚づかみにしたのが、スタンリー・キューブリックの『2001年宇宙の旅』だった。少年時代の私は、この作品のロケ地が“モニュメント・バレー”と知って、トテツモナイ衝動に駆られたものだった。

まさに、夢にまで出てくるような幻想的な光景。白い布を靡かせている紺碧の空と、茶褐色のスペクタクルな荒野とのコントラストに、絶句する。5千万年以上の年月が創造してきた、自然の傑作で

あり、不思議でもある。合衆国のコロラド高原の一部に位置するこの地域は、風と雨が主役となり、岩石の層を、緩やかに、時に激しく、意志があるかの如く、削いできた。

現在、約20万人のナバホ族が、この居留地に合衆国も公認している“国”を築いている。連邦政府は、それこそ何度も、この地を国立公園に指定したいと申し入れたものの、ナバホ側が生活圏を主張し、首を縦に振らなかった。そうした角度から見ると、この聖地を世界遺産に……と巡らせる私の所思も、ひとりよがり映ってしまうかもしれない。それでもこの真景は、少年時代からの私の“約束の地”なのだ。

「私の思う、一番大切にしたい素敵な場所……地球遺産」……そう言う気持ちで紹介させてもらった。



“メサ・ビュート”と呼ばれる、浸食された台地

●標高 3,000 m に湧き出る太古の海の結晶 ～マラスの塩田（ペルー）～

島崎 純（長野県）準会員・旅先での世界遺産巡り、街歩きをこよなく愛する世界遺産検定マイスター

マチュ・ピチュ観光の拠点となる、世界遺産『クスコの市街』から北西へ約58km。切り立つ山の斜面に現れる、マラスの白い棚田では、プレ・インカ（600年前）より変わらぬ製法で、今も塩作りが行われている。

海から離れたアンデスの山中で、塩は貴重な食材のひとつ。リヤマなどの肉を乾燥させたチャルキと呼ばれる保存食の製造にも使われている。何千万年前の大陸移動により、かつて海だった地が山上へ押し上げられ、海水の塩分が固まり岩塩を形成。その地層を通った水が標高約3,000mのこの地に湧出した。塩田の数は大小合わせて、約3,800。水路が蜘蛛の巣のように張り巡らされた塩田を、それぞれの村人が管理している。天

日干しのできた塩を集める道具は、たった1枚の板きれ。塩を詰めた重たい袋を集積所まで運ぶのは、人やロバ。水路や道が壊れれば助け合い、みんなで修復にあたる。インカより続く、塩作りの伝統と相互扶助の精神が、この地には根付いている。機械化された大量生産の安い海塩が出回り、マラスの塩の売り上げが落ちている現在、観光客ひとり5ソル（約150円）の入場料は、大事な収入源だ。

600年続く塩づくりの伝統（iii）、山間斜面を利用した塩田（v）を登録基準に、世界遺産に推薦したい。この先もマラスの塩づくりが続き、塩田の景観が守られていくことを願ってやまない。



数kmにわたり、白い棚田がつづく

●宇治茶を世界遺産に

栗秋 純子（東京都）賛助会員／世界遺産アカデミー認定講師／世界遺産検定マイスター

「無形文化遺産を目指しているのかしら？」というのが、第一印象でした。現在、宇治茶を世界遺産登録しようとする取り組みが進んでいます。日本茶インストラクターとして、私の興味は駆り立てられ、今年5月に活動の中心を担っている京都府農林水産部でお話を伺いました。

日本独自の茶文化は、鎌倉時代に禅僧・栄西（「えいさい」）または「ようさい」が宋からお茶の種子を持ち帰り、栽培を始めてから発展したと言われてます。栄西上人より桐尾（とがのお）高山寺の明恵（みょうえ）上人に種子は渡り、桐尾の茶は栄西上人直伝の「本茶」として、珍重されました。宇治茶は明恵上人が植えたこととされ、桐尾の系譜として特別視されました。戦国時代には、秀吉や千利休が宇治の茶師を登用し、宇治は茶商や茶問屋が集まるお茶の中心地となっていたのです。

「宇治茶を世界遺産に」をキャッチフレーズに、「日本茶・宇治茶の世界文化遺産登録検討委員会」が設けられ、「歴史・文化的景観」、「建築・庭園」、「生産・加工・流通」の各分野の専門家たちによる検討が重ねられていますし、既に登録されている農業関係の世界遺産の、特にICOMOSの勧告内容を分析し、多方面から登録する可能性も探っています。また、検討委員会とは別に、京都府知事から任命を受けた「宇治茶大使」がお茶文化の普及に携わり、文化庁の助言も受けながら、登録への活動が着実に進んでいます。ワインのぶどう畑やコーヒー農園、棚田、テキーラ酒の原料のリウゼツランの景観といった世界遺産は既にありますが、茶畑の世界遺産はまだありません。茶畑の世界遺産第1号が日本で誕生したら、誇らしいと思いませんか。



段々畑にせず、山の起伏を活かした「山なり開墾」が特長の茶畑

サファリの魅力あふれる悠久の地、タンザニア

JUMBO！誰もが満面の笑みで声高に挨拶してくれる陽気な国、タンザニア。

7月6日（土）に開催された『タンザニア大使館 特別セミナー』では、駐日タンザニア連合共和国大使館の参事官フランシス・ベトロ・モソング氏をお迎えし、壮大に広がる自然やイギリス植民地時代を乗り越えてきた歴史、マサラ族の民俗文化など、タンザニアの素晴らしさを様々な視点で語っていただきました。また、第2部の懇親会では、世界遺産アカデミーの北村正任（まさとう）理事長からのご挨拶に続いて、フレッシュ・ジュンベ氏によるタンザニア音楽の生演奏を楽しみ、振舞われた伝統料理、「クク・ワクバニカ（ローストチキンのトマトソース添え）」や「ンディズィ・ザ・クピカ（グリーンバナナのシチュー）」に舌鼓を打ちました。

タンザニア連合共和国は、国土の4分の1が国立公園や自然保護区に指定され、サバンナを駆け抜ける野生動物たちを間近に観ることのできる大自然が広がっています。コーヒー産地としても著名な、アフリカ最高峰キリマンジャロ山が聳る『キリマンジャロ国立公園』や、地球上でもっとも哺乳類が生息しているとされる『セレンゲティ国立公園』、夕暮れ時の赤い陽射しが絶景を生み出す文化遺産『ザンジバル島のストーン・タウン』に、複合遺産『ンゴロンゴロ自然保護区』といった合計7件の世界遺産があります。また、雄大な自然が生み出した豊富な鉱物資源のひとつ、タンザナイト（＝タンザニアの石）は、キリマンジャロ山の空を彩るような美しい青色で、12月の誕生石として知られています。魅力あふれるタンザニアに、一度は訪れてみたいと、憧れの念にかられました。



参事官フランシス・ベトロ・モソング氏

世界遺産アカデミー認定講師 File No.11

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓蒙活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当て、お話を伺います。第11回は、世界遺産アカデミー正会員でもある、岡野正平（おかのしょうへい）さんです。

——世界遺産を通して、人類は繋がっています。

旅行やハイキング、油絵といった趣味を通じて、世界各地の大自然や古都、美術館を訪れると、現地では、必ずと言ってよいほど、世界遺産と巡り合います。10数年前に学んだ、アメリカ州立大学院日本校の経営学修士課程では、色々な国籍のクラスメイトと、各国の世界遺産の話で盛り上がりました。また、動いていた外資系企業や国際機関では、国際会議のレセプションやオフの会話で、諸外国からの列席者や来賓の方々や各国の世界遺産について話す機会も多くありました。そんな折に、新聞広告で世界遺産検定を知り、今までの断片的な知識をもっと深めたいと考え、チャレンジすることに決めたの

です。当時は検定級の名前が異なり、現在の2級に相当するシルバーへの挑戦から始まりました。時に失敗しながらも、ゴールド、プラチナに合格し、2010年秋の検定で、念願のマイスターに合格しました。

仕事の傍らでしたので、必要なテキストを買い込んだ後、世界遺産アカデミーの通信教育を受けました。知識を系統的に整理する上では、エクセルも活用しました。例えば、1899年の「ハーフ陸戦条約の採択」（ここでは第27条で「歴史上の記念建造物」への言及があります）から現在まで、発生年、決定・発生事項、具体的な内容などを一覧表にまとめたり、世界遺産の各基準の代表例一覧や、日本の神社・仏閣の建築様式ごとの世界遺産建造物、十字軍と騎士団の歴史、原人や岩面画・岩絵の歴史といった自分なりのカテゴリーごとにノートを作成

したりしました。今でも新しい情報を得た時点で常に更新し、世界遺産をテーマ別に理解する上で役立っています。もともと通訳ガイド（現在の通訳案内士）の試験のため、日本の外交史・文化史や、国立公園・国定公園、古都の建造物などを学んでいましたし、世界史や世界の大自然などについても、個人的な興味から縦軸の学習を重ねていまし



油絵を習っていた当時、指導講師が描かれた岡野さんの似顔絵

た。その上で、基礎から学び直したことで、地球の歴史、文明・文化という「横の糸」でも結びつけられ、世界遺産を通して、人類は繋がっていると実感できました。さらに、危機遺産や負の遺産を読み解くことで、保全・保護や紛争を避けることの大切さと困難さから、世界遺産の重要性を痛感し、よりいっそう深くかかわっていききたい気持ちも芽生えました。

認定講師としての経験は、残念ながら、まだ多くはありませんが、世界遺産アカデミー主催の様々なイベントに参加しながら、独自の学習を続けています。今後、新たなガイダンスを行う際には、これまでの経験に加え、実際に現地で見聞したことなどを交えて、世界遺産の大切さを伝えていきたいと考えています。

——保護・保全の“カギ”を握るもの

世界遺産登録の目的のひとつは、貴重な自然や文化を次世代に残すことで、そのためには保全・保護が大切です。ひとつのお手本として、ミラノにあるドミニコ会修道院旧食堂の壁に描かれた、レオナルド・ダ・ヴィンチ作「最後の晩餐」の保全システムの見学をお薦めします。ドミニコ会修道院と「最後の晩餐」は、1980年にユネスコ世界遺産に登録されました。遠近法の効果も著しく発揮されている縦420cm横910cmの大作「最後の晩餐」は、当時流行のフレスコ画ではなく、描き直しの可能なテンペラ画です。テンペラ技法によって描かれたこの壁画は、温度の変化や多湿に弱く、過去に修復が何度も繰り返され、1999年によく、最新の科学的技法で修復が完

了しました。一方で、ミラノ中心地のドゥオーモから近いこともあり、この名画を観に訪れる観光客が、増加の一途を辿っていました。作品の保全・保護のためには見学者に制限を設ける必要があり、「新たな部屋の環境管理と見学方法」が導入されたのです。この新システムでは、壁画のある旧食堂に到達するまで、待機室を含め2つの扉で外気を遮断し、空気清浄機が設置され、温度・湿度の環境管理が強化されています。また、見学者数も制限し、1回25人、15分ごとにグループが入れ替わります。見学者は、最初に「第一の扉」の前で、見学者上の注意事項のレクチャーを受け、次に「控えの部屋」に進みます。「最後の晩餐」の部屋へは、前の見学者が退出し、完全に出口扉が閉止した後、入口扉が開くまでは、入室できません。そして、きっかり15分経過後に出口扉が開き、全員が

退室しなければなりません。2002年に訪れた時、この環境管理が正確に実行されていて、他の世界遺産にも応用できるのではないかと感じました。

世界遺産のある地元には、観光資源のブランド化による経済効果への期待が実情としてあります。例えば、ベトナムの世界遺産、ハ・ロン湾の海域では、観光客の無制限の受け入れにより、この海域の汚染と鍾乳洞の劣化が進行しています。多くの船舶会社が競って観光船を運航し、観光客相手に商売する水上生活者も増えているにもかかわらず、排出される廃棄物や排水の適正な処理方法が十分に実施されていないため、海水汚染が深刻化しているのです。また、ダウゴー島に上陸してのティエンクン鍾乳洞見学では、人数制限などは行われておらず、鍾乳洞内は大混雑し、鍾乳石自体にも劣化が見受けられ

ました。しかし幸いにも現在は、JICAや現地の住民参加による環境保全活動などが進み、改善されていると聞いています。

最近では、多くの地域で、地元住民自身に資源への保全・保護意識が芽生えつつあります。世界遺産の理念を十分に理解し、資源保全のためのルールやガイドラインの設定・改善、また、地域の人たちのガイドによる生態系や文化の解説などが、真の世界遺産の保護・保全の“カギ”を握っています。世界遺産検定を入口として、一人でも多くの方にユネスコの精神や世界遺産の意義を理解していただくためにも、世界遺産アカデミーの活動の重要性は、ますます高まっていくことでしょう。私自身も、そうした活動に貢献できれば、と願っています。



岡野さん作、「チェスキー・クロムロフ旧市街」（第11回日美絵画展 油絵画部 審査員奨励賞 受賞）

WHA member file



世界遺産アカデミーのメンバーによる世界遺産との出会いと活動の様子を紹介します。

Let's Enjoy World Heritage

No.060 美しい“ドナウの真珠”ブダペスト



ブダの王宮とくさり橋

2013年5月、中欧5カ国周遊ツアーに参加し、ハンガリーの首都ブダペストを訪問しました。

ブダペストは、“ドナウの真珠”と讃えられる美しい街です。ドナウ川が街の中央を南北に流れ、西岸のブダは王宮を中心に歴史的建造物が多く、東岸のペストは近代的で風光明媚な街並みが広がっています。両岸は19世紀にくさり橋でひとつに結ばれてブダペストとなり、1987年に世界遺産登録、更に2002年には歴史的な建造物が並ぶアンドラーシ通りが追加登録されました。

ブダの丘に聳える王宮はランドマークで、現在では博物館、美術館がある文化の中心地です。モザイク屋根が美しいマーチャーシュ教会は歴代国王の戴冠式が行われた場所。とんがり帽のデザインが特徴的な大理石造りの漁夫の砦からは、ドナウ川の絶景を眼下に一望できます。ライオン像が両端を見守るくさり橋は、吊り橋状

の大きな橋で、歩いて渡ると重厚な造りの主塔やメインケーブルなどを間近に観られますが、結構揺れます。ドナウ東岸にある宮殿のような国会議事堂は、初代国王の名を冠したブダペスト最大級の聖イシュトヴァン大聖堂とともに、ハンガリー建国1,000年を記念して建設されました。「トカイ産貴腐ワイン」とハンガリー名物料理「グヤーシュ」も忘れてはなりません。船上レストランでの夕食後、遊覧船で夜のドナウ川をクルーズしました。ライトアップされた王宮と国会議事堂、くさり橋の真珠の首飾りのようなイルミネーションなどが息をのむほどの素晴らしさでした。

そして、美しい景観の裏に数知れない悲劇。この国は、オスマン帝国に始まり、ハプスブルク家、第2次世界大戦、ハンガリー動乱など、随分と重いものを背負ってきたような気がします。

Personal Data

賛助会員

中村 優

(兵庫県) 世界遺産検定マイスター

No.061 奈良の文化遺産を旅する



町家を保存・活用した今井町の茶屋

シルクロードの終着点である奈良。そこでは、7世紀から8世紀にかけて建てられた木造建築物を見ることができます。石造が多い西洋に比べ、東アジアの国々の建築物は大部分が木造で、戦争等でほとんどが焼失しているため、建築当時のまますべて残っている建物は希少です。法隆寺や薬師寺では、これまでに何度か大規模修理が施され、その都度、当時と同じ材料・構造・工法が用いられました。太古の建築様式を連続と引き継いだ伝統的修理手法により、世界遺産認定のための要件となるオーセンティシティ(真正性)を満たしてきたわけです。

奈良県のほぼ中心に位置し、藤原宮跡で近隣市町村とともに世界遺産登録を目指している橿原市には、江戸時代から続く町並みが残る、今井町があります。伝統的建造物群保存地区に指定され、車がすれ違うのがやっとの狭い通りに、現在も多数の町屋建築が保存され、住居と

して使われています。それらの中で8棟の民家と社寺1棟が、国の重要文化財として指定を受けています。

一方、伝統的建造物群保存地区の岐阜県白川村荻町では、平成7年に「白川郷・五箇山合掌造り集落」として世界遺産に登録された後、たくさんの観光客が訪れたことで、土産物屋や旅館が乱立し、静かな山村の景観が失われるといった事態が起きています。また、世界遺産登録を目指している鎌倉についても、本年5月のICOMOSの勧告では、資産周辺の都市化による景観の阻害が問題となりました。

私達には貴重な人類の遺産を過去から引き継ぎ、未来へと伝えていかなければならない義務があります。人と文化財の共生はなかなか難しい命題ではありますが、その方策について今後も検討していく必要があると思います。

Personal Data

賛助会員

秋葉 孝

(茨城県) 世界遺産検定マイスター

No.062 三宗教が交差する聖地・エルサレム



預言者ムハンマドが昇天したと伝わる、岩のドーム

『エルサレムの旧市街と城壁群』を訪れたのは、今から20年以上前、私がアラビア語を専攻する学生であった時のこと。友人2人と、エジプト、イスラエル、トルコを巡る約1カ月の旅に出た。これらの地域には世界遺産が数多く点在しているが、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の3つの宗教の聖地として、今もエルサレムの街は強烈に印象に残っている。

特徴的な帽子に、全身黒づくめで、長いもみあげの敬虔なユダヤ教徒の存在に、まず驚かされた。彼らが嘆きの壁の前で一心に祈るすぐ隣では、イスラムの聖地、「岩のドーム」の屋根が黄金色に輝いていた。イエスが十字架を背負って歩いたというピア・ドコロサ(悲しみの道)が、聖墳墓教会の建つゴルゴダまで続いている。どこを歩いても、宗教というもの、そして、信仰する人々を意識せずにはいられない街であった。その

一方で、男女の区別なく、肩からライフルを掲げた兵役の若者をいたるところで見かけたり、宿泊したユースホステルの管理人一家が、ここでの生活に不安を覚え、できることなら海外へ移住したい、と話すのを聞いたり、どこか重苦しく落ち着かない雰囲気にも包まれていて、日本という自分の生きてきた環境とは全く異質な世界に、戸惑いや憂いを確かに感じた。

帰国後、学内にいるチュニジアの留学生から「私たちは行くことができないので」と、岩のドームの写真の焼き増しを何枚も頼まれた。彼らにとって、聖地の写真は、持っているだけでも幸せなことなのかもしれない。当時から現在にいたるまで、この地は危機遺産のままである。危機遺産リストから外れ、宗教の違いに関係なく、人々が自由に往来できる日が来ることを願わずにはいられない。

Personal Data

正会員

山本 厚子

(千葉県) 世界遺産検定マイスター

トンガリロ国立公園

平成25年度の第37回世界遺産委員会で、『富士山—信仰の対象と芸術の源泉』が世界文化遺産に登録される見通しだ。山梨県民として、地元で世界遺産が誕生することは非常に嬉しい。富士山の世界遺産登録にあたっては、信仰と芸術・文学に関連する文化的側面を認められているところに特徴がある。世界を旅した時に、富士山と似た特徴を持つ世界遺産を訪れた。ニュージーランドの「トンガリロ国立公園」である。

トンガリロ国立公園は、その美しい景観と火山活動をはじめとする地形的特性が認められ、1990年に自然遺産として登録された。その後、

塩澤輝幸（正会員 山梨県 世界遺産検定マイスター）
「世界遺産検定マイスター、しおやんの世界一周日記」<http://ameblo.jp/shioyann/>
世界遺産検定マイスター試験の合格をきっかけに、実際にこの目で世界遺産を見てみたいとなり、10年勤めた職場を辞めて初の海外旅行に旅立ちました。

マオリの人々が守り続けてきた聖地としての文化的価値も認められ、1993年に文化遺産の登録基準(vi)が追加された複合遺産となる。「文化的景観」を認められた、世界初の遺産だ。

トンガリロ国立公園は、ニュージーランド北島のほぼ中央に位置する。私は平成22年の2月に、拠点となるタウポを訪れた。南半球は夏真っ盛りで、一番の観光シーズンとなる時期だ。トンガリロ国立公園をよく知るためには、自分の足で歩くのが一番いい。公園内の数あるルートの中でも、特に人気の高いハイライトコース、「アルパイン・クロッシング」に挑戦することにした。

アルパイン・クロッシングは歩行距離19.4キ



美しい稜線が富士山を彷彿とさせる、ナウルホ工山



登りはキツイが、振り向けば壮大な景色が広がる

ロ、所要約8時間と、日帰りトレッキングの中では難しいコースだ。マイカー規制があるため、起点と終点が異なる一方通行のコース内での往復は、地元のシャトルバスを利用し、環境に負荷をかけない仕組みになっている。バス会社によっては、宿泊施設からピックアップしてくれるところもあるが、前日までの予約が必要だ。タウポの町で天気予報を確認しながら、出発日を決めた。ひとり旅をしていると、他の旅行者と親しくなり行動を共にすることがよくある。3連泊したタウポでは、素敵な出会いに恵まれて、日本人3人でトレッキングに挑戦することになった。出会いも、旅の醍醐味だと思う。

アルパイン・クロッシングコースの魅力は何といっても、変化に富んだ美しい景観だ。出発地点から、なだらかな登りが続く。早朝の澄んだ空気が清々しい。火山特有の黒い土、溶岩の跡や岩石など、新鮮な風景を楽しみながら、グングンと足が進む。右手にはナウルホ工山が見える。美しい稜線は、まるで富士山のような。しばらく歩くと、急に勾配がきつくなる。階段状に続く登山道を進むのは辛かったが、振り返ると今まで歩いてきた道が、頑張る気持ちにさせてくれる。急な坂道を登って、ようやく頂上のレド・クレーターに到着。火口の周囲には黒い溶岩が広がり、硫黄の匂いが漂い、白煙もと

ころどころに上がっている。トンガリロが生きた火山であることを感じ、先住民が抱いていた山に対する信仰の気持ちを共感した瞬間だった。前方には美しく輝くエメラルド・レイクが待っている。この絶景は、ここまで頑張ったご褒美だ。

下り道は、登りとは違った景色を満喫することができる。クレーターの縁に沿って歩き、草原に覆われた傾斜面を抜けると、これまでのコース内では見ることのなかった森林地帯に入る。緑あふれる新鮮な空気が肌に触れ、疲れた体もリフレッシュする。次々と移り変わる壮大で幻想的な風景は、出発前に抱いていた距離への不安も、全くの杞憂に終わらせてくれた。

時間にすれば8時間ほど歩き、体は疲れていたはずだが、終点が近づくにつれ、寂しさが募ったことを覚えている。やはり仲間と歩いた思い出は、最高の宝物だ。

見た目の美しさに加え、山岳を中心とした広大な自然、それにまつわる信仰。トンガリロと富士山には共通項が多い。トレッキングを通じて、マオリの文化を尊重することが自然保護への取り組みにも繋がると感じた。豊かな自然あつての「世界文化遺産」であることを忘れてはならない。観光と自然保護の両立という難しい問題に直面するであろう富士山も、トンガリロ国立公園に学ぶところは多そうだ。



驚くほど美しいエメラルド・レイクは、ここまで登ってきたご褒美

編集後記

6月、ドイツの世界遺産をいくつか見る機会があった。威容を誇るゴシック建築の『ケルン大聖堂』、内装の豪華さに驚かされる『ヴィースの巡礼教会』。これらの教会は、現在も信者に利用されていて観光客から特に入館料をとっていない。寄付金箱はあるものの入館者の気持ちにゆだねられている。建物の外部にもことさらに世界遺産であることが宣伝されていない。なんとどこかの国の商業主義がミエミエの遺産とはかなり違う印象だ。

今年の世界遺産委員会で、「富士山」が世界遺産として登録された。日本を代表する山が認められるのは素

直にうれしい。文化遺産ではあるが、私の中では自然もすばらしい複合遺産。美観や景観を今まで以上に大事にしてほしいし、国や関係の公共団体にも強くお願いしたい。富士山が「自然遺産ではなく文化遺産として登録されたのはなぜか」という話も入山者に説明できるようなパンフレットも作っていただきたい。登録見込みが立った段階で、早速交通網の整備や入山料の話が持ち上がっているが、「富士山」をどのように守っていくかという視点を一番大切にしてほしい。そのことが、いつかというよりも、長らく入山者を迎えることだと確信する。
(WHA常務理事・安藤登)

世界遺産アカデミー WHAMR

2013年 夏号 第20号
発行日 2013年7月15日
発行元 特定非営利活動法人 世界遺産アカデミー 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F
電話 03-6212-5020
FAX 03-6212-5022
URL <http://www.wha.or.jp>
E-mail member@wha.or.jp
発行人 愛知 和男
編集長 安藤 登